

博士論文要旨

氏名	佐藤（吉村） エリ
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第 20 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 16 日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第 5 条 1 項の規定による
学位論文題目	心は何をまなごすのか —George Eliot が G. H. Lewes から受けた影響を読み解く—

論文の要旨

本論文では、ヴィクトリア朝女流作家 George Eliot (ジョージ・エリオット 1819-80) の小説におけるヒロイン達の視覚行為と精神の描写を、彼女のパートナーであった George Henry Lewes (ジョージ・ヘンリー・ルイス 1817-78) が彼の著作において展開する視覚を中心とした認識論を用いて分析し、エリオット小説における心理描写の深みと道徳的意義を明らかにする。方法として、ルイスが晩年に取り組んだ著作 *Problems of Life and Mind* (『生命と精神の諸問題』1874-9) を中心に彼の認識論・心理学的議論を援用し、エリオットの初期小説及び後期小説におけるヒロイン達の「見る行為」と精神の変遷を検証することにより、エリオット小説のライトモチーフである「記憶」「想像力」「共感」「義務」の意義がいかに浮かび上がってくるかを考察する。

第 1 章では、エリオットの評論“*The Natural History of German Life*”(「ドイツ民族の自然史」1856)とルイスの小説論“*The Principles of Success in Literature*”(「文学において成功するための原則」1865)を通して、両者が芸術において重視していた科学的な直接的観察の重要性、また人間が精神の目で見える「イメージ」についてのとらえ方について検証する。更に彼女が言語(書くこと)に対していかなる考えを表明していたのかを、「イメージ」との関係から考察する。そして実際に小説を執筆するにあたって、彼女が小説執筆前に表明していた「見ること」を重視する姿勢を保持し続けたことを明らかにする。

第 2 章では、「すべての印象が有機体の中でその痕跡を残し、感覚中枢の修正の手助けをする」というルイスの議論を出発点とし、“*Mr Gilfil’s Love-Story*”(「ギルフィル師の恋物語」1858)及び *The Mill on the Floss* (『フロス河の水車場』1860) の Caterina 及び Maggie の自己認識の変遷を、「過去」と「記憶」を鍵として検証する。始めに、個人のもつ記憶や異なった精神が彼女達の見る行為に与える影響について考える。次に、『フロス河』に登場する 3 人の男性達とマギーの関係に焦点を当て、彼らと彼女の関係において、過去がより複雑な形で彼女に関わることを明らかにする。最後に、両作品における結末の意味を考え、両ヒロイン達は「過去をうまく修正し、現在につなぎ得たのか」という問題について考察する。

第 3 章では第 2 章に引き続き、ヒロイン達と過去の間を論点に据えつつ、ルイスの「想像力」についての議論を援用することで、“*Janet’s Repentance*”(「ジャネットの改悛」1858) の Janet 及び *Adam Bede* (『アダム・ビード』1859) の Hetty と Dinah の比較を

通し、彼女達の自己の変化について論じる。まず、記憶と想像力に関するルイスの議論を援用し、ヒロイン達の見る行為と自己との関係性について考察する。特に自らの美を強く意識するヘティーに関しては、彼女と鏡の関係がもつ意味について検証する。次に、過去の経験と意識及び無意識についてのルイスの議論を援用し、ジャネットとヘティーが、現在と過去をつなげ、自己の回復に至るまでの過程を検証する。そして最後に、彼女達同様想像力に強く影響を受けてきたダイナが見せる変化について明らかにする。

第4章は、ルイスが一貫して議論し続けた問題である「主観性」と「客観性」の関係—特に「知覚」及び「精神」と「観念」の関係性についての議論—を援用し、Middlemarch (『ミドルマーチ』1871-2) の Dorothea が他者への共感に至るまでの過程を検証する。まず結婚前の彼女の見る行為を通して、彼女のもつ性質や考え方について検証する。次に Casaubon への誤信を生み出す原因を考察すると共に、エリオットが小説言語を通して示そうとした、彼女の視覚と精神の関係の複雑さを明らかにする。そして、カソーボンに失望したドロシアが、他者への理解を深めていく過程と彼女の風景へのまなざしについて検証する。最後に、カソーボンの死後から結末へ至る過程において、ドロシアが外界及び Will に向けるまなざしを通して、ルイスの言う「主体」と「客体」のつながりが、彼女の視覚においていかに提示されるかについて考察する。

第5章では、ルイスの「注目」に関する議論を通して、Daniel Deronda (『ダニエル・デロンダ』1876-7) におけるヒロインである Gwendolen が、利己的な自己を克服し、「義務」を見出しうるのかという問題について検証する。まず始めに、彼女の自己の鏡像へのまなざしを通して、エリオットが示そうとしたグウェンドリンの精神世界について検証する。次に、他者への「関心」から見えてくるグウェンドリンの本質や彼女が抱えた問題について分析すると共に、Deronda との関係において彼女の精神世界が変化するのか、という問題について検証する。更に本章では、先行研究において論じられることがなかった、グウェンドリンの視力の良さと視野の広さにエリオットが託した意味についても考察する。最後に Grandcourt の死後、デロンダに別れを告げられるに至るまで、彼女がエゴイズムから逃れられなかったことを明らかにする。

ルイスとエリオットは共に「肉体の目」と「精神の目」の密接な関わりを意識し、彼女は小説において両方の「目」の働きを描き分け、ヒロイン達の心理を詳細に描き出していた。また彼らは、過去の影響を受けつつ知覚が変化すると考えており、更に「知識」「感情」「経験」が「見ること」に与える影響に着目したエリオットは、それらが複雑に絡み合いながら変化していくことを小説において示し、その描かれ方は初期小説から後期小説に向かうにつれてより豊かになっていく。更にルイスとエリオットは、人間の視覚の限界とその限界を認めることにおいて生まれる他者への共感を意識しており、彼女はその限界によって生じるヒロイン達の精神における葛藤を鮮やかに描写していると結論づけた。

博士論文審査結果の要旨

2017年2月7日午後1時より口頭試問審査を実施した。まず提出者による論文の概要報告があり、フロアを含めて質疑応答の時間を持った。その後、公開、非公開の口頭試問を経て、審査は午後6時15分に終了した。

本研究は、19世紀の英国女性作家ジョージ・エリオットの小説における視覚性に富んだ精巧な心理描写には、諸科学や哲学、文学的著作を多数残した、作家の生涯のパートナー、ジョージ・ヘンリー・ルイスの影響があるのではないかと、との問題意識から、初期から後期にいたるエリオットの主要小説作品におけるヒロインの認識の変化を、ルイスの晩年の著作『生命と精神の諸問題』の視覚に関わる認識論との比較において詳細に読み、エリオット小説に関して新たな知見を得ようとした成果である。

提出者は、まず、序論前半において、エリオットに対するルイスの影響を扱った先行研究を概観、整理している。それによると、今日までに伝記的な観点からの研究に加え、有機体論、生理学、心理学など諸科学からの影響研究が盛んになってきているものの、総じて概論的ないし断片的に留まっており、視覚認識論からの影響関係研究も包括的な研究は少ないという。特にルイスの科学的関心の集大成である『生命と精神の諸問題』は、出版以来、長く評価が低かったために、これを用いた研究は、海外を含めて現在でも稀少とする。序論後半においては、19世紀初頭から視覚をめぐる科学は人間を「視覚的経験の能動的な生産者」とみなすようになったとし、こうした背景のもと、ルイスとエリオットにおける視覚的認識における主観性の重要性ならびに、その限界を克服する精神のありようの探求が両者の中心的課題であったと捉える。

第1章では、エリオットが小説執筆を開始する以前に書いた、ドイツの民族学者、ヴィルヘルム・ハインリッヒ・フォン・リールの著作についての評論「ドイツ民族の自然史」と、ルイスによる小説論である「文学において成功するための原則」を比較し、この評論においてエリオットは、「肉体の眼」では捉えきれないものを「精神の眼」が拾って「イメージ」が生まれるとするルイスの議論を元に、芸術家（小説家）のもの見方の議論を構築していると述べる。またエリオットは、ルイスのいう言語化による「イメージ」の平板化の危険をさらに発展させて、因習による「イメージ」の固定化という芸術における危険を説き、それを避けるべく芸術家（小説家）は、常に、ものごとの関係性や本質的事実を捉えるために、具体的知識の獲得に加え、ものを直截にみる観察経験が重要であると述べているとする。

第2章では、ルイスが『生命と精神の諸問題』第5巻において展開した「すべての印象が有機体の中でその痕跡を残し、感覚中枢の修正の手助けをする」という議論および知覚の復活に関して述べた議論を用い、エリオットの初期作品である「ギルフィル師の恋物語」と中期の長編小説『フロス河の水車場』の二人のヒロインの自己認識失敗について論じる。生得的な、あるいは個人的、社会的文化的に後天的に獲得された知覚と記憶、思考や感情が、いかに彼女らの見る行為に影響を与えているかを述べ、二人のヒロインは彼らのうちに再生される過去の記憶の呪縛から脱却できず、結局本質的な自己認識に至らなかった、と結論づける。

第3章では、第2章の過去と記憶という論点に加え、「個人の意図を最も支配するものが

精神に宿り、それと相容れないすべてのイメージを排除するもの」(第5巻)としてのルイスの想像力論を用い、初期作品「ジャネットの改悛」のヒロインと中期作品『アダム・ビード』の二人のヒロインの認識の変容を論じる。このヒロイン達は、それぞれ過去に対する関係性や記憶から触発される想像によって認識に躓きが生じているものの、最終的には、第2章のヒロインとは異なり、無意識に貯蔵されていた記憶の復活により、過去を現在につなぎ得て、より広い認識へと至ると論じる。

第4章では、ルイスが『生命と精神の諸問題』において一貫して追求した「主観性」を越える精神性の議論—特に「知覚」「精神」「観念」の関係性についての議論—を用い、『ミドルマーチ』のヒロイン、ドロシアの精神的変化を彼女の見る行為を中心に詳細に論じる。ドロシアは当初、偏った想像力によって生じた認識の歪みのために失敗を犯すが、後にルイスのいう「洞察力」(第2巻)によって修正され、自己の認識を深め、かつ他者への共感を持つに至るとする。さらに、こうしたドロシアの認識の変容が、彼女の外界や事物をみる眼差し、視覚に変化を引き起こしている点を丹念に明らかにし、ルイスの探求が視覚性を重視するエリオットの小説においていかに発展的に実現しているかを論じる。

第5章では、『生命と精神の諸問題』第5巻におけるルイスの「注目」に関する議論を通して、エリオット最後の長編小説『ダニエル・デロンダ』における女性主人公グウェンドレンの視覚行為の特性を論じ、彼女の自己認識の失敗に結びつける。「近眼」ながら、他者への共感的認識に至ったドロシアと異なり、生理的な視覚としては広視野を持ちうる眼のよい「遠視」のグウェンドリンが常に注視するのは、実はエゴであり、そのために、結局彼女は他者への共感を広げえないまま終わるとする。

結論では、第1章から第5章までの議論を踏まえ、視覚の主観性や、その限界を越えようとする人間精神の働きについて述べたルイスの生理的・心理的論考が、エリオットの小説作品に与えた影響を再確認し、エリオットは、ルイスの影響のもと、その小説の心理描写において独自の複雑な陰影を与え、かつ認識をめぐる道徳的意義—自己の認識の限界を認め、他者への共感的な理解を持つことの重要性—をも展開し得た、と結ぶ。

以上のような論旨で展開される論文に関して、口頭試問では、次のような問題点等が指摘された。序章において、先行研究の援用についてはさらに精密さを求めたい。また芸術家(小説家)論について述べた第1章においては、エリオットがそれを読み手に伝える表現についてどのような考えがあったかについても論じておく必要があったのではないかと。第2章、第3章における議論はやや図式的である。また用語や内容解釈において整理が不十分なため、表現に混乱が見られる部分があった。とはいえ、第3章において、ルイスが過去の経験が無意識領域に生きていることを示すために用いた“chamber”という単語や、蘇る記憶を闇に走る稲妻として表現したメタファーが、エリオットの「ジャネットの改悛」において同じ文脈で使用されていると論じた部分は、当時の生理学、心理学の知見が両者に共有されていた事実を裏付けるものであり優れた論考であった。また第4章、5章におけるヒロインをめぐる「近視」と「遠視」のメタファーに注目した読みも優れている。全体を通しての問題点は、引用の解釈方法に、日本語訳や要約に頼る傾向があることである。エリオットの文学の本質を深く捉えるためには、その言語の多義性、複雑な言語使用について十分に配慮する必要がある、その分析を深めるために文体論の知見を解釈に取り入れることを求めたい。

以上、先行研究の評価や議論展開の周到性、資料比較の際の厳密性、資料細部の分析や読み込み等、今後さらに深めてほしい点は少なくない。しかし、従来あまり光が当たっていなかったルイスの著作を用い、エリオットの主要作品における視覚的描写に、その影響を詳しく読み込んだ本研究の成果は、高く評価できる。またジョージ・エリオットの豊かで難解な英語と、読みにくいルイスの著作について真摯、真剣に取り組んだことは、今後提出者がさらに文学研究を深めてゆくに足る資質を示している。よって、本論文の成果は、博士（文学）学位論文としての条件を満たしているものとして合格と判定する。

2017年2月21日

主査 溝口 薫 教授
副査 和気 節子 教授
学外副査 福永 信哲 名誉教授
岡山大学教育学部